

特集2

戦後75年 平和を考える  
北本に住む人が語る満州引揚げ体験

現在の平和への道のりを知るため、北本市で語り部の活動をしている浅野卓さんに戦後混乱の時代のお話を伺いました。旧満州には多くの日本人が移住し、ポツダム宣言を受諾してもなおつらい日々は終わりませんでした。



あさの たかし  
浅野卓さん

父親の勤務地(満州鉄道)である旧満州の大連市で生まれ、5歳の時に父の転勤で牡丹江市に移住。7歳で国民小学校に入学し、その年(昭和16年)の12月に太平洋戦争が勃発しました。  
現在は語り部として、軍国主義に扇動された時代の恐ろしさや敗戦後に満州から引き揚げてきた当時の体験を語り継いでいます。



※旧満州は今の日本の約3倍の広さ

「平和に溺れてほしくない」

戦後の混乱 ～少年から奪われた平穏な日常～

日本の敗戦  
全財産を捨て南へ  
満州のどん底生活

昭和19年頃、日本は敗色の陰りが濃くなっていました。当時牡丹江市に住んでいた私たち家族は、ソ連が攻めてくることを恐れ、全財産を捨て、とにかく南を目指して、屋根のない列車に乗り込みました。列車の中で天皇陛下の玉音放送を聞き、日本の敗戦を知りました。  
列車は南へ南へと2日間走り続け、私たち家族は撫順市にある満州鉄道の寮にたどり着きました。  
日本の通貨はもう使うことができず、生きていくためには生活費を稼がなければなりません。  
私(当時11歳)と弟(当時9歳)は毎日コークス(※)を拾い、倉庫に忍び込んで小麦粉を集め、母がそれらを市場に売りに行きました。撫順炭鉱に菓子売りに行ったものの、蹴飛ばされ、菓子をいれた盆をひっくり返されることもありました。

※石炭を蒸し焼きにした燃料のこと



平和を考える実行委員長  
かほこ ゆきお  
金子行男さん

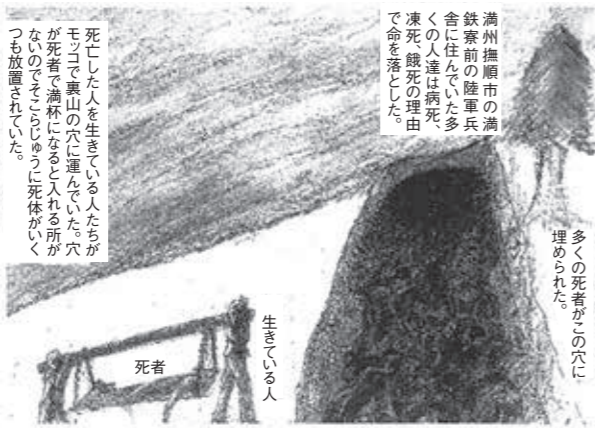
戦争のない  
平和な世界をつくろう

平和を考える実行委員会では、毎年7・8月に「平和を考える集い」として、平和映画会、戦争体験者による講演会、原爆の絵や図の展示等を行い、平和の尊さを訴えています。戦争の悲惨さや原爆の残酷さを知ること、一人ひとりが自覚を持ちながら平和意識を高めてもらいたいとの思いで取り組んでいます。

今年は、終戦75年の節目です。世界に視野を広げてみますと、宗教や人種差別、貧困による紛争等が絶えず、やりきれない気持ちを持っています。市民の皆さんが先の戦争等により、大勢の尊い命が奪われたことを決して忘れないよう、後世に語り継ぐことが私たちの使命であると思います。みんなで戦争のない平和な社会を作りましょう。

裏山の穴に  
つめこまれる遺体

寮の前に陸軍兵舎があり、そこに住んでいる人が毎日亡くなっていました。死体は裏山の穴に埋められました。戦争がなければこの人たちは死なずにすんだのにと悲しい思いで辛かったのを覚えています。



※モッコとは網の四隅に釣り綱をつけ、棒でつって運ぶ道具

満州からの引揚げ  
生まれて初めて見る祖国

日本へ引き揚げるための許可が正式に認められました。昭和21年5月に葫芦岛市から大型引揚船に乗船。魚雷で攻撃され、沈没した船があるという噂が流れていました。道

中では、多くの幼子が亡くなり、親は遺体を保管できず、我が子の亡骸を海に投げ入れられました(※)。



※船の中は衛生状態が悪く、シラミを媒介して感染する発疹チフスが流行していた

張り詰めた空気が続くなか、誰かが甲板で日本の民謡を尺八で奏でたときがありました。その音色に耳を澄ませながら見た、月の光が差し込む海の情景は忘れられません。  
1か月の航海の末、無事に京都府の舞鶴港へ入港しました。私は生まれて初めて祖国日本を見ました。もう敵に追われることはない、自分の命は確保されたかと安堵し、あの苦しんだ底生活を二度と体験することはないと思いました。

上野駅で見た戦争の傷跡  
日本での新しい生活

上野駅で下車すると、地下道には物乞いをする傷病軍人があふれ、複

戦争を知らない皆さんへ

私は、戦争の辛く悲しい体験をし、死に直面して命の尊さを強く感じました。今の日本の平和と繁栄は、戦争で命を落とされた方々の尊い犠牲のうえに成り立っています。また、平和に溺れないよう常に危機意識を持ち、国内外の動向に関心を持ってください。平和が続くことを願って止みません。

戦後75年に向けた平和への願い

今年は、戦後75年という節目の年です。時代(とき)を経て「令和」という新時代を迎え、悲惨な戦争や原爆を体験していない世代が増え、戦争に対して関心が薄らいできています。  
国際化やグローバル化が進む昨今、海外との交流も盛んになり、私たちの生活は、昔よりも豊かになっています。しかし、世界に目を向けてみると、いまだ戦禍の火は衰えず、各地で地域紛争やテロが繰り返されているため、

飢えや貧困に苦しんでいる人がたくさんいます。このような中、戦争を知らない私たち世代に与えられた使命は、戦争や原爆を他人事とは考えずに、一人ひとりが平和について訴え、その尊さを次世代につないでいくことです。今を生きる私たちは改めて、戦争や平和について考えていく「時代(とき)」にいると思います。  
最後に、戦争や原爆により犠牲となられた戦没者並びにご遺族の皆様、哀悼の意を表するとともに、一日も早く世界平和が訪れることを祈念し、戦後75年を迎えたメッセージとさせていただきます。



北本市長  
北本 三宮幸雄

※令和2年の平和を考える集いは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となりました。 図 市民課市民相談担当(☎594-5529)